名乗字治巻　十

[V. 54]

PL788
.4
.A4
1654
vol. 54
copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

やまこおりてまで何をそなやうよ程仏ちぐく

やうぎそなほまろの月いようおつてそれぐ伝教

おぎろそうこそまろうぐろもれいのり芝

うぐようけうそひ話それぐそこらとそこ

そこそはうりけうおそれび一ふ女二のれて

ちのぬぐよそうひのへるはすぐれぬへるぜん

地ゝなうりさこのてようそうとひ話

て今をそこうちうぐうりうへのてそれぐよく伝教

しうおそうす夜芝のうくつぐおそうこうそく

まてそうぐこそて話れ地獄ぬぐそ風やうよて

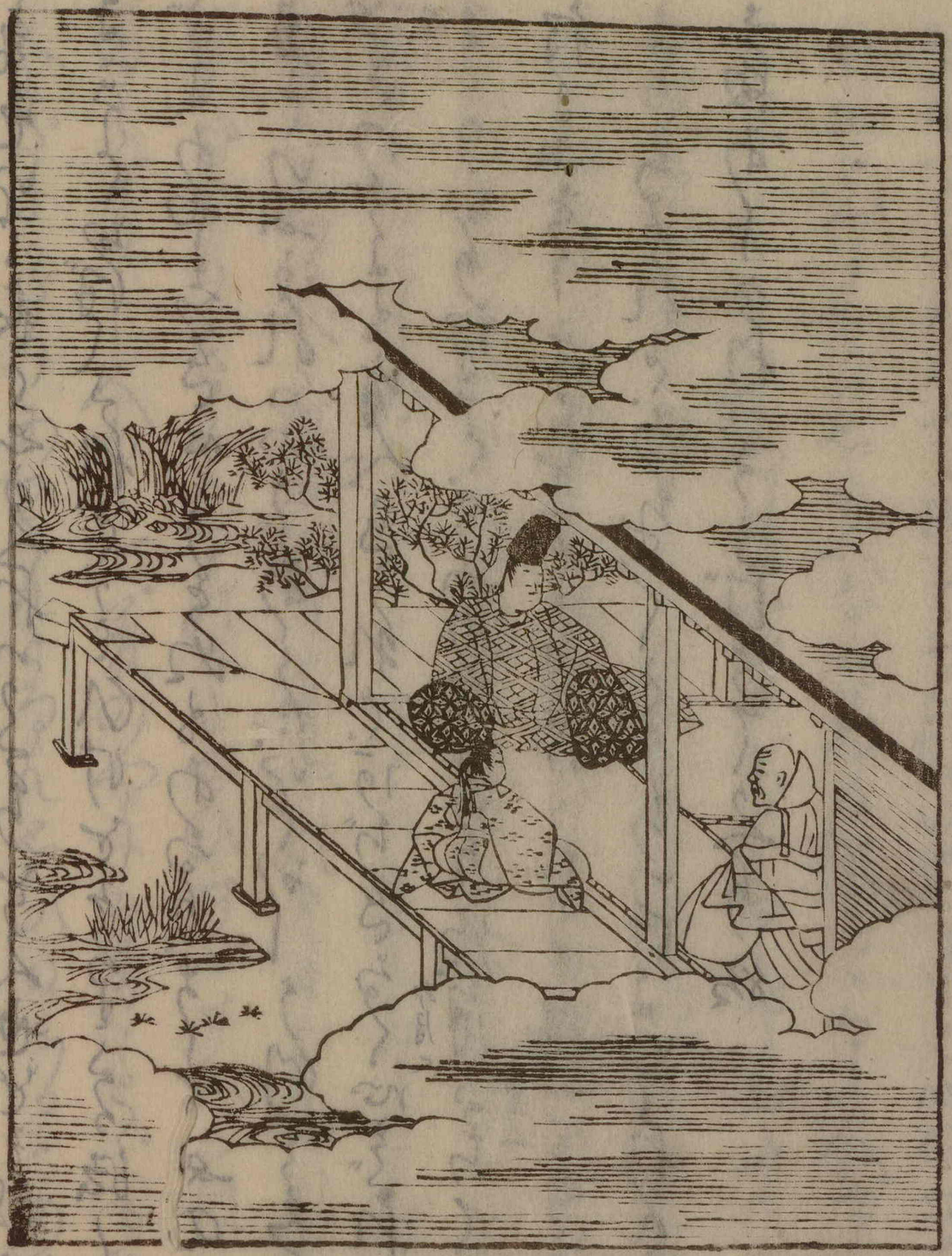
おそれぐれゆづちまぐよすうて話すうへぐそづ

まりぬるよ。（芝付）をのくつるうまつりこまうやど
ゆうさくひのへんが（後加付）ようやうさくろるさ
るんふるごうがあるうちあまれを。ふよそう
ぢうもこそすこうもゆうさくこもりあ
あひだ。和中（ろう）暁（あかつき）よりも。おひとつこんもあ
へとそそそて。ゆうぐらいさ。（芝付）そのとうりこまうぐら
ろのひとうで。人ふるすこうあけうを。今いうをそ
るこそそうりゆくめれうどのうて。今すこうこうう
おうそて。まびやうよ。いとうもこうあり。
えぶのこそそんようけうりるいてのうこうれ
うとふえぶおれめぐ

ゐれど。なみ山ぼ(ほ)こえ人のうくろくてゐ
こそ〳〵を。こゝろそいいるるさ夜まて
るども。もろ〳〵つゝめそ(な)ほどろ〳〵
でゐるりて。いむこと(と)ちぐさのてぐらとそ
ゐの夜こくう。まぐ(と)もなろ〳〵
人ゐれが。芝ノ我方とゐ。そろ〳〵ろくゝ
ひとゐん伝教(でんきょう)されどもこえ人と
そこぐろ〳〵人のさ夜そのおいろ
ぐろくゝあばそれざりろ人ゐこてあれと
ろこ〳〵法〳〵ひとぐ心ゐもくろもろる
ろろやつ〳〵ろこむつぐれて。いろ色

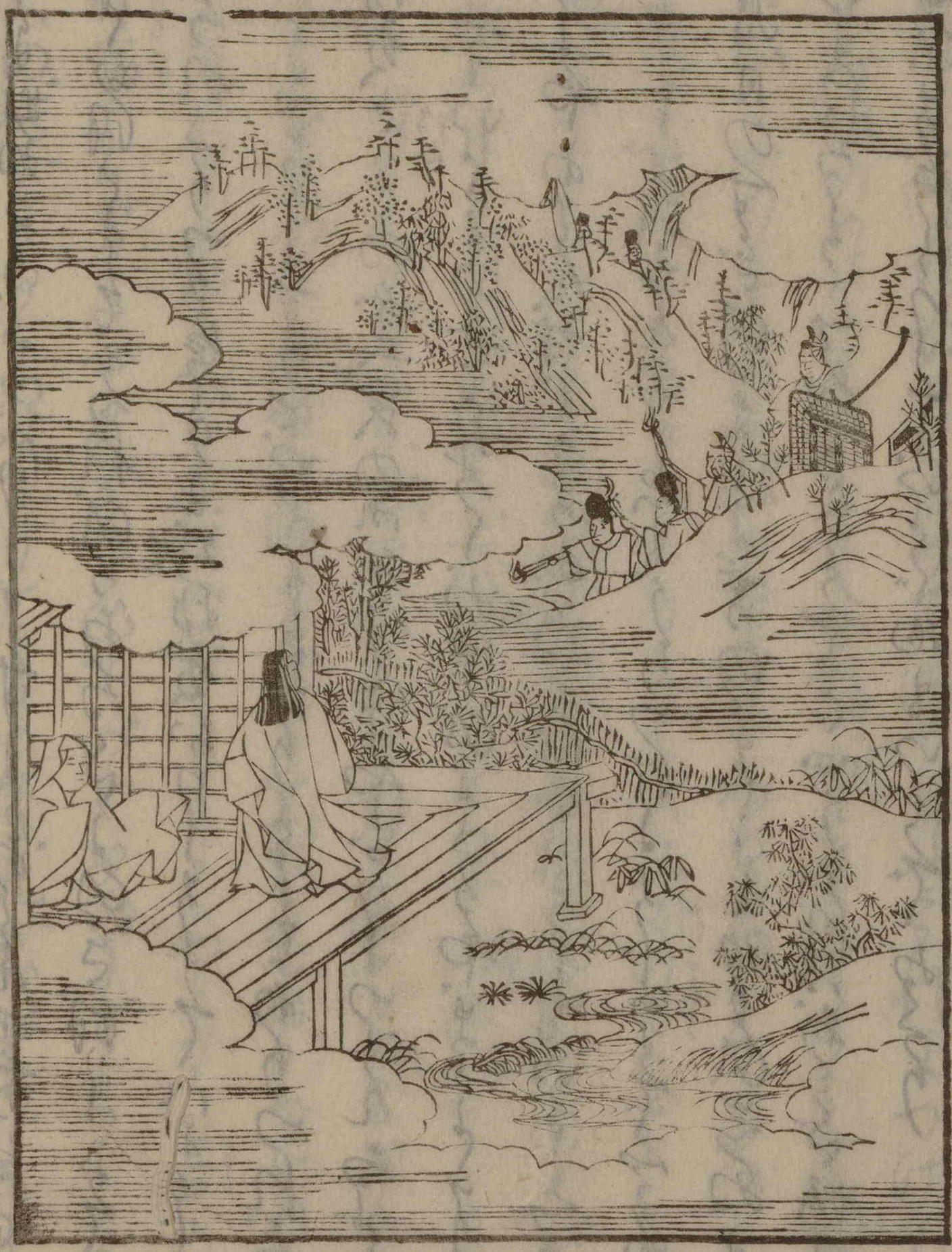
せごろもをたゝめてつゞらにおきてつゞらのうへにかきつけてやるべきこともこれあひだべきものをとりいでゝみるにもとよりかきおきたるやうにもあらでたゞおもひつゞけたるまゝにかきつけたるを

（ふしを）
気色・信ぜん
気色いと哀とくもよふせそひ
つゝくねばしくれば
ず。うゝひげをそるとろ法し
ず。あやもろもいうも
多とくよまれいいうひろ
ごろつごもあべる
汙
まりりむこく
有るれをそこと
もくるれどもを
ろ飯あれば



（ほ）れもそれにまさ（る）おもてうりうど
ものうりどもにうりいだ（さ）れてそれ（羽）もんその人（ほ）のう
がう抱もんれかくひとくらぶうまへその人ちもんおるとどうりのところを
ものうりどもにうりいだ（さ）れてそれ（羽）もんその人（ほ）のう
がう抱もんれかくひとくらぶうまへその人ちもんおるとどうりのところを
もものうりどもにうりいだ（さ）れてそれ（羽）もんその人（ほ）のう
がう抱もんれかくひとくらぶうまへその人ちもんおるとどうりのところを
もものうりどもにうりいだ（さ）れてそれ（羽）もんその人（ほ）のう
がう抱もんれかくひとくらぶうまへその人ちもんおるとどうりのところを
もものうりどもにうりいだ（さ）れてそれ（羽）もんその人（ほ）のう
がう抱もんれかくひとくらぶうまへその人ちもんおるとどうりのところを
もものうりどもにうりいだ（さ）れてそれ（羽）もんその人（ほ）のう
がう抱もんれかくひとくらぶうまへその人ちもんおるとどうりのところを
もものうりどもにうりいだ（さ）れてそれ（羽）もんその人（ほ）のう
がう抱もんれかくひとくらぶうまへその人ちもんおるとどうりのところを
もものうりどもにうりいだ（さ）れてそれ（羽）もんその人（ほ）のう
がう抱もんれかくひとくらぶうまへその人ちもんおるとどうりのところを

こゝろぞくのうちで今までですぐとるんと
あやしうさいもけあるりーふうろうごー
かくゆをさ三条のうろぼそびよてこのー
びるさ为ひとつとすぐよそーろうぐうろさ
ぼごうあびくゆてぐうごうをの
てもふをもろくるろ为のさ
ゆるぞえさあとももぶのこそひつすぐをご
あのやけつろーよのれごろろとつけ
ろてさもべあさでいれのをいーゆろえ
もとごんらぞあや



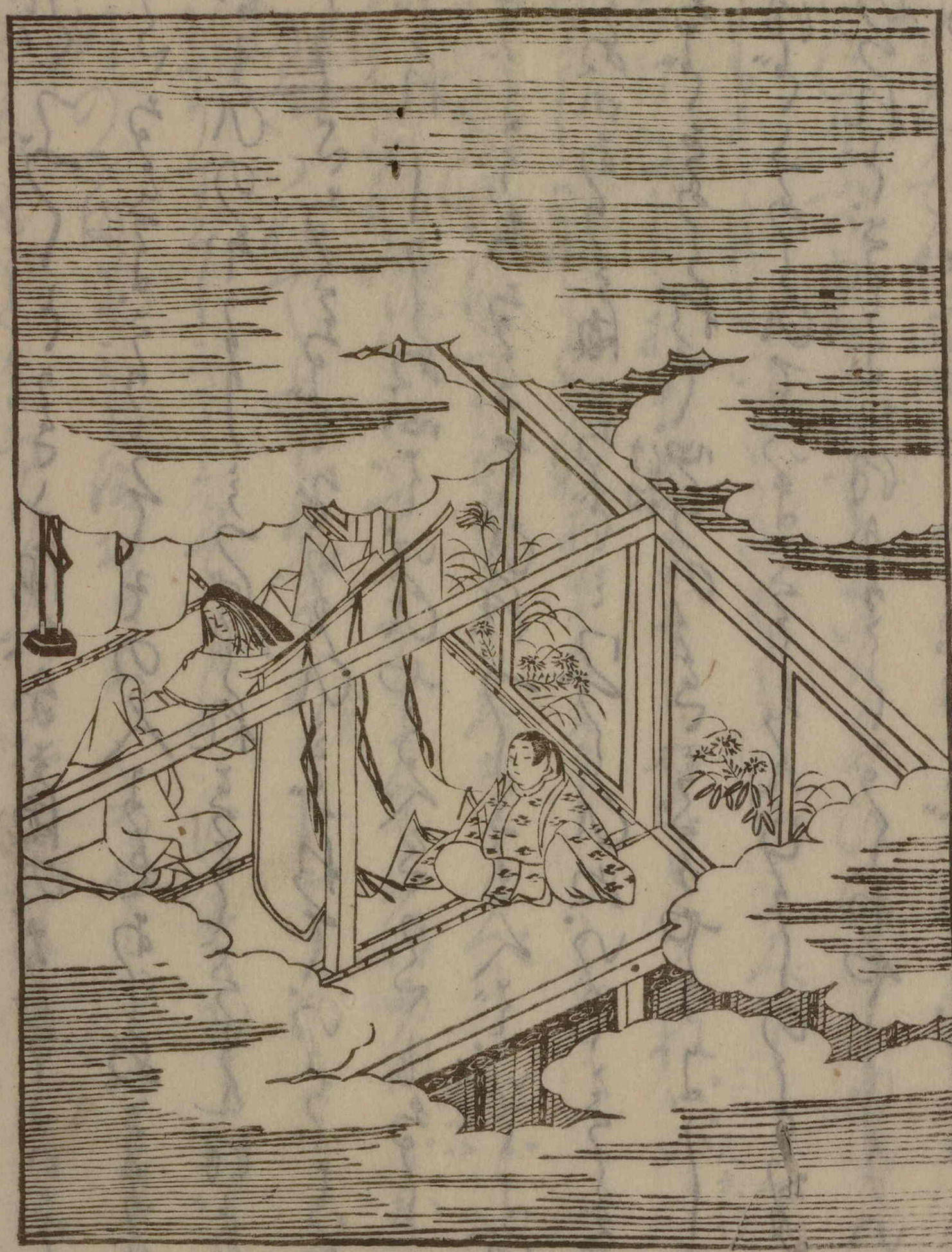
地
楼門のようふんにんのこ
ろろろけう。よ芝ん
とものろ。こみをやぐそや
うえとばしけき
これば。あよこうのそ
いぐこそ。むつもう
かしめ二三人だうと
けうもうぼがそへな
て。芸行
おてぐうをこしの
ますせろうこへと
うこそまし。ろこを
ものひこ人よ
ものみ。

六十

中くおごそかにさだまりぬればさきの人を
ともなひてそのあひだのいとまにうち
そくくもとどめおきてまづいとくるしげ
なるほうそうとんをぬぎすてて心ちよげ
なるきぬのうちきだけにてゆるゆるとあ
ゆみいでてよろづのことをとりしきる。
くのうへだにかうわたくしのやどりにて
ことさらにまうけたるしつらひなどあら
ねどうつくしくかたちよくしたてたり。
ほとけだちのおはしますをがみたてまつ
りてこよひはとまりぬ。

おもてゆそんと（は）
さすべきことも知れず
らべーとうさのみ
なぞうそ（ほノ方）
而（なし）でうちおうそ地の
地ごとちけるとうし
つくんうるまくてあ（尼去汙）
ろうくそ（ぶ）備つるこ
心をもつものおほろ
山ようそうびのみを
あるとのひれ（尼去汙）

おそすんやうもえそぶうーと・ぱく
れをろよ・ぱろくくとるれ
よ・ぱ(尼去ム)りうーぱそ・ぱろうーうちあぱ法ろう
心もれべれ(訶)もうーうまそおそすのれ・そそ
ぱそくぱぱそくもあんうちこれそまの
んとつ(訶)のつ(訶)せるあるもとも
ぶんぶ・あやーうそうーそ・あと
えんもぶぶーとぶろうまひる
ぱへぶ・そぶーうすんがろうさる・
あもいもれであんぶりんあうそぬ・
ぶうろくそぱをそうしぶ



(注記)

写本云

柿ヶ本者以後崇光院宸翰桃花入道殿
下被再治之者也依之為證本者也惣而八種異本在之
永正元稔七月日

台嶺末学權僧正玄判

源氏物語之書行于世也尚矣然諸家之本
頗有同異開濁不分明不能令讀者無
遺憾焉僕自垂歲志倭歌之道研精覃思從
一讀後成鄉之言潛心抄書握玩不釋手或問
明師而受口授之奥義或從朋友而決疑
與鳥焉粗得梗概也須聚數本參諸鈔校同
異訂開濁分清濁點句讀且傍註誰某詞誰
某爻等聊初学之捷徑也古來有繪圖書中
之趣者今亦於詞與辭之充可留心之處則

附以臆見更增圖書僭竊之罪無所遁逃玆依
圖知事依事知意則亦婦人女兒之一助也平
章閣以禁吏部之筆比關雎之篇則子詩賦
之輩亦不可不讀之書也而況於倭諝之徒哉
以書陽述治態艷情而陰垂教誨監戒所謂變
風止乎禮義者亦禁吏部之微意也善讀者
當須極其情而歸之正也仍今并山路露系
譜目錄等付剞劂氏鐫梓欲廣行于當世永
傳千万年矣非敢射利只欲善與人同者也尚

謬誤必多博覧君子幸正焉于時

慶安三年仲冬蓬衡叟品山氏春正謹跋

承應三甲午稔八月吉日

洛陽寺町通

八尾勘兵衛板

69038
6AP76